

その時、渡世風の男が瓜を売る親爺から少し離れたところで『皆さん、私が今瓜を作って御馳走するから見ていて下さい。』といいながら、懐中から瓜の種を出した。その種を地面に置いて土をかぶせ扇でパタ／＼あおぐと芽が出た。サア延びろ／＼、パタ／＼やると、蔓はドン／＼延びる。ソレ摘苳だ。見る見るうちに四方に延びて花が咲いた。瓜がなった。見る／＼瓜は育つ、何十となく見事になった、瓜は見る／＼熟して来た。『ソレ、皆様食べてみさつせエ。どうだ甘かろう。お客人ハイ。お前さんもハイ。』と出来た瓜を集まった人たちにみんな御馳走してしまった。この不思議な光景を先刻から気をとられて見ていた甘瓜売りの親爺が気づいた時には、ボテ籠の瓜は一ツも無くなっていた。犬飼の嘉作さあだった。

三、ある日、嘉作さあは田の草とりの人たちに逢った。何か嘉作さあ、面白い事見せてクンネエか。何もそだに面白い事ってあんめエ、といいながら、キセルの吸がらをポンと手の平に受けてヒヨイと田の中に投げた。ところが不思議や煙草の火は青々と生育した稲にもえうつり。次から次へ田一面に燃え広がり皆枯れてしまった。皆は驚きかつたまげた。いつの間にか嘉作さあはいなくなって田はそのまま青々と生育を続けていた。

四、嘉作さあは歩いているときでも、笠を胸に当てると落ちなかつた程早足だった。一晩に仙台まで法事の饅頭を受取りに行つて来たとか、ある人には七間（十二メートル）高さ十間（十七、八メートル）の石垣を一晩に作つたとかいい伝えられている。

五、こうした幻術的な行動が、当時の幕藩体制下にあつて天領私領を問わずおそれられたことであろう。或いは天領の代官藩領の掛り役人を通して村名主村役人等に目に見えない圧力があつたのではなからうか。

兄が二ツ玉をこめてうつつたその一ツの玉は右手に握つて居たとか、一弾は口中に食わえたまま二弾目で殺